

はじめに

INTRODUCTION

本調査報告書は、平成5年に行われた静岡県小笠郡浜岡町にある中部電力（株）浜岡原子力発電所に係わる発電所構内および周辺地域の植生調査を纏めたものである。浜岡原子力発電所に係わる植生調査については、既に1980年および1986年に同様の内容の植生調査報告が既刊されていることから、今回の植生調査は補完的なものとして行われた。すなわち本報告書では、既存の報告書で記載されなかった植生について新たに報告書に追加すると共に、蓄積された見知に基づいて、植生単位の変更が行われた。この結果、既存の植生図（縮尺5万分の1の30km圏現存植生図、縮尺1万分の1の詳細現存植生図および潜在自然植生図）が修正された。さらに、昭和58年以來今日まで行われてきた、ポット苗を用いた生態的植栽による発電所構内緑化工事がほぼ完成したことをふまえて、今回新たに発電所構内緑化地区の植栽樹木の成長状態に関する、現況調査が行われた。

本報告書が、地域の自然環境と調和した電力資源の開発や、人間の健全な生活環境を保証する自然や緑に囲まれた原子力発電所造りに資することが期待される。

現地での植生調査に際しては中部電力（株）浜岡原子力発電所の職員の方々に終好御便宜を戴いた。また横浜国立大学環境科学研究センター研究生であった田中茂氏（現長野県小学校教諭）および同センター大学院生の前田浩之助氏にも現地調査および資料整理に際し協力戴いた。記して厚く感謝の意を表するものである。

I. 調査地域の概況 General overview of survey areas

植生調査は、中部電力（株）浜岡原子力発電所のある静岡県立小笠郡浜岡町を中心として、御前崎町、相良町、小笠町、大東町、吉田町、菊川町、榛原町、金谷町、磐田市、袋井市、掛川市、島田市、藤枝市など周辺30km圏内にある5市9町で行われた。本調査では、地域の植生概況を明確にする目的で、30km圏内に点在する神社や寺院に比較的良好な状態で残されている自然植生を中心とした植生調査が行われた。この他、発電所近傍では二次林、植林、二次草原など代表的な代償植生についても植生調査が行われた。

1. 調査区域の自然環境 Natural environments

1-1. 気 候 Climate

浜岡原子力発電所に最も近い御前崎の気象測候所によれば、本地域の気候環境は、年平均気温16.0°C、年間降水量は2,109.8mmで温暖な太平洋岸型気候下にある。また、吉良の暖かさの指

数では125～140の間にあり、浜岡原子力発電所を中心とする半径 30km の範囲にある低地、台地、丘陵、そして海拔 800m 以下の低山地帯は、いわゆる暖温帯気候下において照葉樹林の発達する常緑広葉樹林域（ヤブツバキクラス域）に位置している。しかし、30km 圏の北部では暖かさの指数が 110 前後の区域がみられるが、そこではクリ、クスギ、コナラなどの夏緑広葉樹の優占する二次林植生も発達している。

1-2. 地質・地形 Geology and topography

御前崎付近の地質をみると、御前崎の北部から御前崎の先端に至る牧ノ原台地は主に第四系更新統の礫層、泥層から構成されているが、一部菊川東岸部の台地斜面などには新第二系の掛川層群とされる礫層、砂層、シルト層およびそれらの互層がみられる。また新野川、箴川周辺の台地では礫岩、砂岩、シルト岩からなる新第三系相良層群をみることができる。新野川や菊川の流域の沖積平野は、その中心部には表層に有機物シルトが卓越し、いわゆる軟弱地盤として知られた地域である。この他本地域の沿岸部の沖積低地、台地、丘陵の表層には、一般的に沿海部の砂丘地帯からの風成砂が厚く堆積している。

2. 植生概観 Vegetation

植生調査の対象となった浜岡原子力発電所の近傍および周辺 30km 圏は、気候環境的には太平洋岸型の温暖な気候条件下にある。したがって調査地域のほぼ全域に分布する潜在自然植生は、シイ類、タブノキ、カン類を中心としたヤブツバキクラスに属する常緑広葉樹林と考えられる。しかし現在では高木の常緑広葉樹の優占した自然林の多くは破壊され、現在では寺院や神社の社寺林として僅かに残存する程度である。この他、小面積ではあるが本地域に分布する自然植生としては、内陸部山地帯の海拔 600m 以上に分布する常緑針葉樹林のシキミーモミ群集やミヤマシキミーアカガシ群集、河畔林のムクノキーエノキ群集、渓谷林のイロハモミジーケヤキ群集、海岸風衝低木林のトベラーウバメガン群集やマサキートベラ群集、河辺ヤナギ林のコゴメヤナギ群集、海岸風衝草原のイソギクーハチジョウススキ群集、海岸砂丘植生のハマグルマーコウボウムギ群集他、河辺草本植生のヨシ群落やカワラヨモギーカワラサイコ群集等、そして水生植物群落のヒシ群落等が挙げられる。

これに対して本地域の大部分を占めているのが、人為的干渉下に成立する二次林や植林等の代償植生である。本地域に分布する代償植生として、常緑萌芽林のコシダーウバメガン群集が沿岸砂丘地や台地、丘陵地に広く分布する。一方落葉二次林のクスギーコナラ群集、クレーコナラ群集そしてクレーミズナラ群集は内陸部山地帯に分布する。先駆性二次林としては、クサイチゴータラノキ群集やヤシャブシーヤブウツギ群落が小面積ながら発達している。針葉樹二次林のモチツツジーアカマツ群集は内陸部の丘陵、山地帯にみられる。植林のうちクロマツ植林は沿岸部の砂丘地や風成砂の堆積した台地、丘陵地に広く分布する。内陸部の丘陵、山地の谷斜面にはスギ

・ヒノキ植林が発達している。谷部の一部では小面積ながら竹林のマダケ・モウソウチク林がみられる。また小河川沿いの川岸にはメダケ群集が帯状に分布している。沖積低地、台地、丘陵地には、広くネザサーススキ群集に代表される二次草原が発達している。山地の植林や二次林の伐採跡地には、ベニバナボロギク・ダンロボロギク群集などが発達している。路傍や路上には、キノノゲシ・カナムグラ群集やカゼクサーオオバコ等の雑草群落が分布している。発電所構内の芝地やゴルフ場などにはコウライシバ群落等の人工草地在り。静岡県は、温州ミカン等の柑橘類や茶の栽培が盛んであり、本調査地域内においても沿岸部の台地、丘陵部を中心として、比較的広い面積で分布している。内陸部の山地帯では、小面積ながらクリ等の落葉果樹園もみられる。沿岸砂丘の後背地や台地、丘陵部の緩斜面には耕作畑地が広がっている。また沖積低地の大部分は、水田耕作地として利用されている。しかし近年、農村部の都市化が波及するに伴って、沖積低地や平坦な台地上の畑地などは、工場敷地、住宅地としての開発が進められている。